

全学院教職員礼拝

## 主の慈しみは絶えない

学院長 佐々木 哲夫

**主の慈しみは決して絶えない。**

**主の憐れみは決して尽きない。**

### 哀歌 3章 22節

今年度の宮城学院の年度聖句として、「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない」(旧約聖書哀歌3章22節)が与えられております。哀歌とは悲しい気持ちを表す歌のことです。紀元前6世紀の世界帝国バビロニアが弱小国ユダを侵略し、神殿を破壊し、人々をバビロンに連れ去った出来事が、この書物の歴史的背景と考えられています。今日の世界情勢と相通じるものを感じます。

文学的技巧も特徴的で、例えば、1章から4章まで、それぞれの節の最初の文字が順にヘブル語のアルファベットになっています。おそらく、朗唱するための工夫だったと思われます。22節の最初の文字は、ヘブル語のヘットで始まっており、同じく、23節も24節もヘットの文字で始まっています。それゆえ、22節だけでなく24節までをひとくりにして考えたいと思います。

\*

本日は、三つの言葉に注目したいと思います。一つ目は「主の慈しみ」、次は「主の憐れみ」、三つ目は、24節の「主を待ち望む」です。一つ目の「慈しみ」は、「忠実な愛」のことで、イザヤ書に「〔主は〕とこしえの慈しみをもってあなたを憐れむ」(54:8)と記されてあるように「憐れみ(優しい愛)」と対句になっています。

しかし、神様の「慈しみ」と「憐れみ」は、好き勝手に注がれるものではありません。自発的で自然な関係の「絆」が前提とされています。例えば、旧約聖書ルツ記のルツをあげることができます。ルツ記は、夫を亡くしたルツがやはり夫を亡くした姑ナオミの故郷への移住に自発的に付き添うお話です。ルツは、ナオミと苦楽を共にします。その姿は、故郷の人々から「真心を示した」と評価されます。この「真心」と翻訳されているヘブル語は、「慈しみ」と同じ単語です。このような「慈しみ」や「憐れみ」と表現された主の愛は、絶えることも尽きることもないのです。哀歌の歌人は、「慈しみ」と「憐れみ」に富む主を待ち望むと歌っています。

＊ ＊

1944年のクリスマスから翌年の新年までの短い期間に、アウシュビッツなどユダヤ人収容所でかつてないほど大量の死亡者が出ました。労役や栄養や健康状態は通常だったので、その原因は、多くの囚人がクリスマスに家に帰れるだろうとの希望に身を委ねていたが、それが実現されなかったことによる失望であると考えられました。その出来事をふまえて『夜と霧』を著したヴィクトール・フランクルは、真の希望について、次のように語っています。

心の支えには、「将来にある支え」か「永遠にある支え」かの二つがある。「永遠にある支え」とは、宗教的な人たちの場合であり、この人たちは、将来を支えにする必要がなかったので、無理な要求を将来の運命に任せなくとも気持ちをしっかりと持つことができた。永遠に心の支えをおくことは、現世の人生をゆったりとした確かなものにする、と解説しています。

「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない」は、宮城学院が永遠を支えとしていることを告白するものです。

＊ ＊ ＊

宮城学院における「永遠の支え」の具体的なものをいくつか挙げてみます。例えば、言葉とされたものとして、建学の精神やモットーがあります。視覚的なものは、校章であり、キャンパスのレイアウト全体です。校舎のレンガ色は、合衆国ドイツ改革派教会のえんじ色を想起させます。芝生のみどりに映えて美しく調和しています。教育としては、学校礼拝やキリスト教・聖書のクラスが挙げられます。「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない」が、永遠を支えとする宮城学院の今年度の聖句であることを感謝しつつ再認識したいと思います。

(2022年4月27日)